

---

# 向かい席の彼女の恋

石里ゆえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

向かい席の彼女の恋

### 【Zマーク】

Z0667BA

### 【作者名】

石里ゆえ

### 【あらすじ】

陸美の目の前に座るのは、ちょっと困った存在であるお局様。ある日、そんな彼女が転任してきた男性に恋をして・・・恋で変わっていく女を、恋で変わらない女の視点で見た物語。

またか。狭山睦美はパソコンのモニタの向こう側で激しく咳き込んでいる西川聰子を半ばうんざりと見やつた。

数年前、社内で集団インフルエンザが発生したのをきっかけに、咳やくしゃみをするときはハンカチで口を押さえる、ひどいときはマスクを着用するといった『咳工チケット』が推奨されるようになったが、彼女にそんなものは通用しない。むしろ豪快に、周囲に撒き散らすかのように咳き込み、くしゃみを連発する。それも毎年一冬中、続くのだ。アレルギーなのか、何かもつと別の病気なのかは知らないが、周囲の人間にとつてはたまらない。

時折、モニタを飛び越えて、睦美の顔に冷たいものが飛んでくると、冗談抜きにぞつとする。

社員食堂の掲示板にも咳工チケットに関するポスターが貼つてあるのだから誰か注意すればいいのだが、彼女に注意できる者は残念ながらいない。彼女の気分を損ねることを言えば、きんきんとヒステリックな声で倍返しじるか、四、五倍は返される。挙句、しばらくの間は根にもたれる。それが分かつているから、面倒くさがって上司さえ彼女に意見しようとはしないのだ。

彼女がなぜそこまで強氣でいられるのかといえば、ひとえに社歴だろう。睦美は入社十年目の中堅社員だが、聰子はその比ではない。世間で言うところのお局様だ。齢は四十なにがし。

もちろん社歴や年齢でお局と決め付けられるわけではないし、実際お局化していない彼女と同世代の女性社員も多い。前に聰子と同期だという女性と一緒に仕事をしたこともあるが、頼りになる素敵な先輩だと思った。要するに個人の資質の問題なのである。

誰も注意できないからといって睦美はあきらめなかつた。一日の三分の一以上を過ごす職場環境のこと。そう簡単にはあきらめられない。それに一番被害を被っているのは目の前に座る睦美なのだ。

悩んだ挙句、態度で示し、本人に気付いてもらおうと考へた。聰子が咳やくしゃみをしたときに、睦美のほうがとつさにハンカチで鼻と口を覆うのだ。しかし、聰子はその行為に含まれるメッセージにはとんと気付かず、あろうことか「あら、狭山さん。つわり?」などとまつたく笑えないと冗談を吹っかけてきたのだつた。

これには睦美も返す言葉もなく、肩を落とすほかななかつた。

もつとも、聰子の問題はそれだけではない。たとえば、まわりがあつと驚くような服装で出社したりする。レオパード柄の超ミニスカートに生足だつたときはさすがに皆ドン引きだつた。いくら内勤で客先へ出かけることがないとはいへ、あんまりだつた。彼女の辞書には『咳エチケット』だけでなく、『ドレスコード』という文字もないのだ。

あとはお局としてはかなりベタな若手社員いじめ。もちろん女子限定だ。事務処理がメインの聰子とは違い、睦美は営業担当のため直接いびられたことはないが、犠牲者は何度も田にしている。見たくなくとも、座席が真向かいのせいで視界に入つてしまふのだった。

先ほどから咳き込み続けている聰子をちらちらと見ながらメールを打つていると、見知らぬ男性がそばへやってきた。背は高く、精悍な顔つきをしている。イケメンといつてもいい。

「お仕事中すみません」

彼はおもむろに声を張り上げた。声の大きさと視線から、睦美だけではなく、もつと広範囲に向かつて話しかけているようだつた。実際、十人ほどが手を止めて、彼を注視している。聰子の咳も止まつた。

「今日から隣の部門でお世話になることになつた橋本悠一です。以前は丸の内支店にいました。分からることもあるかと思いますが、よろしくご指導ください」

落ち着きのある良い声だつた。しかも、支店から本社への異動といえば、睦美の会社では出世コースだ。

睦美は橋本の頭のてっぺんから靴の先まで素早く眺めた。年は三十歳くらい。結婚指輪は見当たらない。スーツの上からでも引き締まつた身体つきが分かるところをみると、恐らくなんらかのスポーツをやっているのだろう。

別に値踏みするつもりはないのだが、営業という職業柄、相手を観察するクセがついているのだった。

挨拶が終わり拍手に包まれると、女子社員のこそそとした黄色い声が漏れ聞こえてきた。それも一人や一人ではない。

睦美の会社には女性が多く、男性もいるにはいるが年齢層が高いし、既婚者も多い。そんな中、イケメンで将来有望な独身男性がきたとなれば、皆寄つてたかるのが当然で、驚くことなど何もない。

そう 驚くことはないはずなのだが、睦美はふと目にした光景に心底驚いていた。

あの聰子がハンカチで口元を押さえたまま、瞬きもせず橋本に熱い視線を送っていたのだ。しかも、こほこほと可愛らしい咳をしている。先ほどまでの豪快さはどうへいったのか。

若手の女子社員が期待に胸を膨らませて騒ぐのは分かる。しかしよりによつて聰子までもが虜になるとは考えもしなかつた。別に年齢云々の問題ではない。今は年上ブームだといつし、もし聰子と同期の女性が彼と付き合つたとしてさして驚かないだろう。

聰子だから、睦美は驚いているのだ。

普段から傍若無人な振る舞いを見ているせいか、彼女が自ら他人に興味を持ち、他人のために変わるなどありえないと心のどこかで思つていた。彼女は相手を気遣つたり、話題を合わせたりするタイプではない。だから彼女の恋人の条件は、相手のほうが彼女に興味を持ち、尽くしてくれることだろうと勝手に考えていた。どんなわがままでも聞いてくれる男。聰子の相手はそのくらいでないと務まらない、と。

それがどうだろう。目の前の聰子は十歳以上も年下の男にすつかり心を奪われている。

睦美はもぞもぞとお尻を動かして椅子に座り直すと再びキーボードに指を置き、しばしその姿勢のまま静止した。思いもよらぬ光景を田の当たりにしたせいですっかり調子が狂ってしまったのだ。

聰子はといえば、いまだハンカチを手放さず、口元に添えたま

だ。その頬は心なしか赤い。まるで十代の少女のようだった。

うん、まあ、一時的なものだろう。睦美は思った。

一、二日もすれば、いつものお局・聰子に戻るに違いない。そう自分に言い聞かせ、メールの続きを打ち始めたのだった。

## 第1話（後書き）

3部に分けて掲載予定です。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

睦美の予想に反して、一週間が過ぎても聰子の様子はおかしなままだった。

毎日、レースのハンカチを持つて、「くしゅん」とか「こんこん」とかごく控えめに咳やくしゃみをする。おかげで冷たいものが空から降つてくることはなくなつた。

が、彼女の変貌ぶりはそれだけではない。

まず、服はすべて買い換えたのではないかと思うほどに変わった。その身にまとうのは女性らしいドレープのきいたワンピースや、シックな色合いのスーツなど、今まで見たことのない服ばかりだ。メイクカラーも派手目のものから、落ち着いた深みのあるものへと変わつた。それだけで見た目の印象は相当違う。人間に値段を付けられるなら、ちょっとプレミアが付いた感じだ。

加えて、驚いたことに職場の若手社員に優しくなつた。しかも女子にも分け隔てなくだ。分からぬことは丁寧に教え、困っている人を見かけたら助け舟を出す。そろばかりか美味しいお菓子を見つけたのと言つては配り歩いている。

今まで嫌味だの、若手女子へのいびりだの、ヒステリックな説教だのが当たり前だった人とはとうてい思えない。まるで別人だ。

一体、どうしちゃつたんだろう。睦美はモニタごしに聰子を観察しながら、首をかしげた。

もつとも、どうしたもこうしたもなくその答えはひとつしかない。すべては恋する女心のなせるわざだ。言うなれば、乙女心。

聰子がそんなものを持ち合わせていたのかとか、ちょっと氣味が悪いとか、そんなものは偏見だと睦美は自分を戒める。

恋する権利は年齢や性別、容姿に関係なく、誰にでもある。それが叶うかどうかは別として。そして恋というのはどうやら理屈ではないらしいということも知つていて。世間一般的のカップルを見てみ

れば、彼らは自分に釣り合いつか、見合いつかそんなことで相手を選んでいるわけではない。

だから、聰子が十歳も年下の男相手に恋に落ちたとしても、何ら不思議なことではないのだ。そしてその恋で彼女が変わったとして、それ 자체悪いことではない。

ちゃんと分かっているのに、睦美には靴を左右履き間違えてしまつたような違和感がどうしても拭えない。別の誰かが聰子の皮をかぶつているのではないかとつい勘ぐってしまう。

それは多分、恋愛で人が変わるということが睦美にはピンとこないせいで。恋をしたことがないわけではないが、いつもそれは他人事のようだった。自分は透明のガラス瓶の中に入っていて、すべてはその外側で起こっている。そんな感じだ。自分の気持ちすら例外ではなく、恋する自分をガラス越しにじつと冷静に見ていて自分がいる。当然、恋にのめり込めるはずもなかつた。

付き合つたある男は「君との距離が縮まらない」とドラマのよくな台詞を口にして、自ら遠ざかつていった。

そんな睦美に、聰子の気持ちを理解しろといつまづが無理な話なのだ。

恋する女として、すっかり変わつた聰子だったが、その恋は一向に進展する気配を見せなかつた。

といつのも、聰子は陰から橋本を見つめているだけで、積極的な行動には出でていよいよなのだ。一回だけ、「コピー機の紙詰まりで困つていた彼を手伝つていたのは見かけたが、接点といえばそれくらいいだつた。

お菓子を配るときは、必ず彼のいる隣の部門まで足を延ばしているのが少しいじらしかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0667ba/>

---

向かい席の彼女の恋

2012年1月5日23時46分発行